

畜産における暑熱の影響と対策について

近年、地球温暖化の影響もあり、一年の中でも特に夏季の暑熱は年々深刻さを増しています。県内においても、熊谷地方気象台で観測された平成30年度の猛暑日は37日を記録しました。ばらつきはありますが、約20年前から16日程度多く観測されています。私たち人間が生活するうえで、非常に厳しい夏の暑さですが、家畜にとってはこの暑熱ストレスは様々な影響を及ぼします。

今回は、暑熱ストレスが各家畜に及ぼす影響と、その対策について説明します。

【家畜への影響】

牛

泌乳牛の適温域は5〜20℃で、子牛では10〜25℃、肉用牛では5〜25℃とされています。この気温を越え、体温が上昇すると、食欲不振・増体重の減少・発情持続時間の減少・人工授精後の着床率の低下による繁殖成績の低下がみら

れ、泌乳牛ではさらに乳量の減少や乳脂肪、乳タンパクなどの乳成分の低下も起こるようになります。また、分娩前後・高泌乳・基礎疾患などがある牛は、特に深刻な熱射病を引き起こしやすくなります。

豚

繁殖豚の適温域は10〜25℃で、肥育豚でも10〜25℃とされています。この気温を越えると食欲が減退し、発育停滞、増体重の減少がみられます。

肥育豚では、暑熱ストレスによって深部体温が上昇することで、小腸から栄養分の消化吸収機能が低下するという報告もあります。

繁殖雌豚ではさらに、繁殖成績の低下・発情遅延・死産・新生子豚の体重減少が起ります。

雄豚では、気温の上昇に伴う体温の上昇により、精子を造る機能が減退し、精子の性状や品質が低下します。このような精液では受精能が低くなっているため、交配に用いられても受胎率は低下します。

鶏

採卵鶏の適温域は20〜30℃で、

肉用鶏では15〜25℃とされています。この気温を越えると、呼吸数の増加・採食量の減少・増体重の減少がみられます。鶏は汗腺を持たず、呼吸数を増やすことで体温を低下させようとしますが、熱放散の効率は、発汗によるものと比較して劣るため、斃死（へいし）が増えることもあります。

肉用鶏では、暑熱によって筋肉中のタンパク質含量が低下します。採卵鶏では、産卵数の低下・卵の重量の低下・卵の殻が薄くなります。

【暑熱対策】

畜舎

畜舎環境面からの対策として、寒冷紗・遮光ネット・すだれの設置があります。屋根への断熱材の設置や、石灰乳の塗布も日光による畜舎温度の上昇を防ぐ効果があります。畜舎内に熱がこもることを防ぐために、換気扇・扇風機での送風・散水も効果があります。

家畜

飼養管理面からの対策としては、

家畜の密飼いを避けることと、飼料給与は涼しい時間帯に、良質で消化率の高いものにするのが大切です。食欲不振により、栄養不足になることもあるので、必要に応じてビタミンやミネラルを補うことも考えてください。

管理者

家畜だけでなく、飼養者の方も熱中症にならないように、日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うようにしましょう。作業中はそのどが乾いていなくても20分おきに休憩し、毎回コップ1〜2杯以上を目安に水分補給を行うようにしてください。

もし、頭痛やめまい、体が熱いにも関わらず汗をかかないなどの体調不良になってしまった時は、涼しい環境へ避難し、衣服をゆるめ風通しをよくして、水分・塩分補給を行いましょ。脇の下や首の両側、足の付け根を冷やすことも効果的です。症状が良くならなければ、すぐに病院を受診してください。

本格的な夏が始まります。適切な対策で暑熱に備えましょう。

